



Illustration : Takeuchi Kazuya

駒込

小田嶋 隆

駒込の歴史

駒込という地名は「駒」つまり馬に由来する。たぶん、江戸時代に、侍の連中が乗る馬をどうかし場所だったのだろう。私は、特に歴史に詳しい者ではないが、これぐらいな事は見当がつく。

すぐ隣に、駕籠町というのもある（現在は本駒込に併合されている）。これも、きつと駕籠と関係があったに違いない。

かように、駒込、巢鴨から本郷、小石川にかけては、江戸の名残を残す地名や史跡が多い。

であるから、このあたりをちよつと歩いてみると、八百屋お七が火を放った寺であるとか、赤ひげ先生がいた養生所跡だとかいったものに、ひょこつと出食わす。

千代田区や中央区あたりの江戸史跡が大方コンクリートの壁に封じこめられてしまったのと比べて、文京区の江戸は、とにかく、まだ、息をしているのである。

明治の香りをとどめる史跡も多い。

特に西片、本郷の周辺には、漱石、鴎外をはじめとする明治の文豪や、政治家、実業家の住居、あるいはそうした歴史上の人物が行きつけにしていた古い店がかなり残っている。

しかも、主だった史跡にはちゃんと説明の札が掲げられているし、坂道や塚みたいなのにも、いちいち説明の看板が立ててある。こういうところが、いかにも文京区らしいところだ。

つまり、歴史があるのだ。

もちろん、北区にだって歴史がないわけではない。現在が、過去の蓄積の上にある以上、どんな町にも、当然それなりの歴史はある。

が、北区の歴史は、主として無名者の歴史であり、貧者の歴史だ。

ということは、それは、社会科の教科書が言うところの「歴史」ではない。「歴史」なるものは、もっぱら時の権

力者が発布する布令の類や、戦争の帰趨を追いかけて回しているばかりのもので、雑民の生まれ死にはひどく冷淡なものだ。

「この場所では勝海舟と坂本竜馬が会談した」ということになる、そこは史跡になる。

信長ぐらいの人になると、腰掛けた石までが名所旧跡扱いになる。

ところが、一夜にして十万人の市民の生命が灰になった東京大空襲の日、都の指定休日にさえなっていない。

たぶん後の世の人々の無責任な感傷の中では、名前も知れぬ何万人が死んだことよりも、山本五十六が「トラトラトラ」てなことを言ったとか言わないとかの方が重要なのだ。

「民草」という言葉を、黄門さまはよく使うが、彼のよ

うな慈愛に溢れる名君にしてからが、民衆を草としか見ていないのであるから、自民党の連中が選挙区の人民を粟田呼ばわりにしたからとて、驚くには当たらない。

どうしたのだろう。

最近、私はひがみつばい。

文京区の歴史が富者と強者の歴史で、北区の歴史が都市周縁民の貧困と病苦の歴史なのだとて、そんなことに今さら私が噛みつく必要はないではないか。

駒込に戻ろう。

駒込は、その昔、五代將軍徳川綱吉時代の老中、柳沢吉保の別邸があったところだ。

で、その別邸は、現在、六義園という都立の公園になっている。

なるほど、強者の庭、立派なものだ。駒込駅の南側の広大な土地に広がるその回遊式の庭園には、池がめぐらされ、築山が盛られ、滝がしつらえられている。そして、園内の各所には、歌枕や名所旧跡を模した三十六景が配され、水辺の一角には茶室が置かれている。

いつの世も、文化芸術の華は、金と権力のもとにある。そういうことなのだ。

文京区に江戸の名所が多いのは、単にそこが大名の別邸の多い土地柄だったからだし、明治の史跡が多いのだから、結局は東京帝国大学がそこにあったからなのだ。

ああ東京大学、と、私は言いたい。

なぜって、東京大学は、私が少年時代を通じて、ずっと入るつもりでいた大学だったのだから。

まだ受験の本当の恐ろしさを知らない、生意気な小秀才だった私は、授業の合間や塾の行き帰りなどの折々に、東京大学への通学路をあれこれ検討したりした。

駒込

HIZAKURIGE

「池袋から丸ノ内線に乗って本郷三丁目の駅に出るか、それとも栃木屋の前からバスに乗ろうか」

当時は、赤羽の自宅のすぐ近所から東大正門前に行くバス路線があったのである。

東大行きのバスに乗って、東大に行く。

素敵じゃないか。

私は、バスで東大に通うことに決めた。

東大合格。

それは、決意とか野心というよりも、もつと甘く心踊る、夢想に近い種類の考えだった。

「なによりあの大学は、上野動物園に近いし、野球のグラウンドも広いがあるからな」

私は、度々夢想した。

「午前中の授業が終わったら、水族館に行つて、屋上のナイルワニを眺めながら弁当を食べよう」

素敵だ、と私は思った。

他人がどう思うかはいざ知らず、ワニ好きの少年にとって、それは夢のようなキャンパスライフだったのだ。

しかしながら、私の夢は破れた。

私の少年時代の夢は、徐々に徐々に、長い時間をかけて、風船にあげた針の穴から少しづつ空気が抜けて行く

みたいな具合に、少しずつ色あせて、最後はベシヤンコになった。

「学力は最低だし、浪人したからって真面目に受験勉強するとも思えないし、いっそ就職したらどうだ」と高校の担任教師は言った。

それほど、私の学力は低下していたのだ。

が、私の心は、自尊心という言葉を知らなかった。

私は、教師の言葉にムツとして、即座に決意した。

「よし、来年を見て。一年間死にもの狂いで勉強して、必ず東大に入つてやる」

高校三年間を通じて、数学、物理、化学といった理系の科目のほとんどで0点を連発していた私ではあったが、なかに、死ぬ気になって一から勉強すればなんとかなるように思えたのである。

が、勉強を始めてすぐに、私は悟った。

無理なのである。

一週間ほど、一心になって微分の勉強を試みたものの、皆目理解できなかったのである。

私が「なんとかなる」と思ったのは、そういう学問について、あまりにも無知だったからに過ぎないのだ。

こうして、私の十年來の夢は、しばみ切る寸前に、少しの間ふくらんだわけなのだが、なまじにふくらんだおかげで、かえって大々的に破れることとなった。

だから、私にとって、東京大学という名前は、常に「ああ」という接頭辞付きで思ひ出されるのであり、駒込の駅なども、一種感傷的な色彩を帯びて見えるのだ。

ところで、高校の頃、私は「微分」を「微力二分力」、「積分」を「分力タタ積モリ」と、漢文風に解してみせて得意になっていた。

感心してくれた同級生も何人かいたが、彼らも私も、東大には行かなかった。

東大に行ったのは、

「数学は漢文じゃありませんよ」と言った竹之内君だった。